

新潟医療福祉大学「連携総合ゼミ」における学生と教員の参加アンケート結果 3年間の分析から

松井由美子、高橋直樹、村田憲章、真柄彰
新潟医療福祉大学連携教育研究センター運営委員会

【背景・目的】連携総合ゼミは本学の連携教育の集大成となる4年次の演習科目である。毎年90名前後の学生と教員50名以上が参加し、大学間連携により本学以外に薬科大学や歯科大学も学生が入り、近年国際化も進みフィリピンや台湾からの参加者による英語発表も実施されている。

ここ3年間は参加人数も140名前後と安定し、国際化や事例のモジュール化も進みITを駆使したWeb会議の実施やグーグルスライドを使った発表資料の作成なども円滑に行われるようになった。3年前に始めた学生と教員に対するアンケートも継続され学生の学びや連携総合ゼミに対する満足度について明らかになったので報告する。

【方法】連携総合ゼミ最終日に学生及び教員を対象に連携総合ゼミ活動に対する内容のアンケートを配布し、事例・GW・先生のFT・メンバーの尊重・助け合い・グループワークへの貢献・他メンバーからの学び・対象者中心・自らの専門性・満足度の各項目について5（強くそう思う）から1（全くそう思わない）の5段階尺度で回答を得た。また、感想や意見は自由記述欄に記入してもらった。倫理的配慮として目的・方法を説明し成績などには反映しないことなどを説明し回答をもって同意とした。

【結果】各年度の学生アンケートの回収率は以下の通りであった。

26年度：配布90枚 回収73枚 回収率81.1%

27年度：配布79枚 回収77枚 回収率97.5%

28年度：配布87枚 回収77枚 回収率88.5%

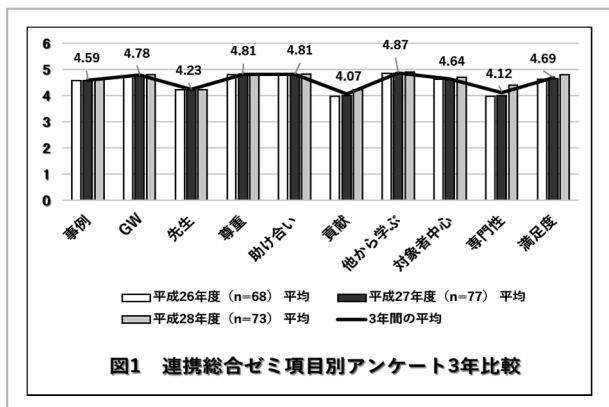


図1 連携総合ゼミ項目別アンケート3年比較

図1は3年間の得点比較である。上部の数値が項目ごとの3年間の平均値を示している。

アンケートの属性は性別・年齢・専門・所属大学で、項目の詳細は以下の通りであった。

アンケート項目は以下の和文に英文を併記したもので、①事例は興味深かった、②グループワークは楽しかった、③先生はいつも活動を見守ってくれた、④メンバーはお互いを尊重し合った、⑤メンバーはお互い助け合った、⑥私はグループワークに貢献できた、⑦私は他のメンバーから学んだ、⑧対象者中心の支援策を立案できた、⑨自分の専門性を深めることができた、⑩私は連携総合ゼミに満足できたの全10項目であった。

得点の上位は「⑦他から学んだ」4.87、次が「④お互いを尊重」4.81と「⑤お互い助け合った」4.81であった。低い得点を示したのは「⑥グループワークに貢献」4.07が最も低く、「⑨専門性を深めた」4.12、「③先生の見守り」4.23と続いた。

学生の満足度を従属変数にした重回帰分析では「②グループワークは楽しかった」「⑨専門性を深めた」の2項目について有意に相対重要度が高かった。「⑧対象者中心」を従属変数に持っていくと学生の場合は「⑩満足できた」「①事例は興味深い」「③先生の見守り」が有意に相対重要度を高めた。

【考察】得点の上位の項目は3年間、コンスタントに高い値を示しており、他から学び、お互いを尊重し助け合うというグループワークの促進要素を含んだ内容である。まさに英国の連携教育センターCAIPE¹⁾が連携教育の理念や要素として示しているものでもある。また、低い項目は自分がグループワークに貢献できていないことや自らの専門性を深めきれなかったという思いの表出であり、毎年低い値になっている。満足度を高めるグループワークの楽しさは4.78と4番目に高い項目であり、満足度に貢献できていると考えられるが、専門性を深めることも満足度への相関が高いため教員によるファシリテーション力も必要であると考えられる。連携総合ゼミで求められるのは対象者中心の支援策を考えることにあり、それには事例の要素や教員の見守りが必要であることが示されている。事例の中に対象者のQOL向上のための情報や社会資源などの提供や教員による介入の必要性なども示唆された。

【結論】他のメンバーから学ぶことやお互いを尊重し合うことなど連携教育の理念や要素となる内容の項目が3年間達成度が高かった。連携総合ゼミの満足度を高めるためにはグループワークの楽しさや専門性を深めることが必要な要素である。また、最終的に対象者中心の支援策となるような事例検討や教員の見守りも大切である。

【文献】

- 1) Centre for the Advancement of Inter-professional Education : CAIPE [http://caipe.org.uk/resources/defining-ipe/] (最終検索日：2017年8月10日)